

間もなくあなたの

作: 岡崎ルツ子

演出: 小川政弘

★登場人物

田口敬太(小学4年) 田口家の次男坊。

良介(敬太の友達) 敬太のいとこ。

節子(同) 近所の農家の娘。

敬太の父・義伸 43歳。

敬太の母・静江 40歳。

昭子(敬太の姉) 16歳。女学生

役場の高橋 22歳。復員兵。

バート・マクダニエル 50歳。宣教師。

ナレーター(成長した敬太)…63歳。

<前編>

ー田んぼの一本道。セミの声。

歌声 いざ来い、ニミツ、マッカーサー、出てくりや地獄へ逆落とし…。

親父 こおらー、おめえだち、何しとるー。

子供たち わあああー。

ーてんでに走る音。草やぶかなんかに隠れる。ー

敬太 (息を切らして)ここまで来たらいじよぶだ。

節子 うん。驚いたね。

良介 でも、ナシ、捕ってきた。

敬太 よし、手柄だ。(がぶっ)てっ、ぺっぺっぺ。

良介 おえー。ぺっぺっぺ。まずーい。まだ早かったあ。

N 1945年、昭和20年の7月。あの夏はまた特別に暑かったのを覚えている。わたしは国民学校、今の小学校の3年生だった…。わたしの名は田口敬太。生まれ育ったのは、宮城県北部の南方村。都会の人たちよりいらかましとはいえ、わたしたちは、大人も子供もいつも飢えていた。いとこの良介、隣の節子、良介の妹でちび

のコトエ、それにわたしの4人は学校帰りに田んぼのあぜ道や土手でカエルを捕まえたり、用水路で魚を釣ったりして腹の足しにしていた。

—突然の空襲警報。軍用機の飛行音。子供たち駆け出す。—

良介 グラマンだ。

敬太 隠れろ。

—ガガガガガーッと機銃操射の炸裂音^{さくれつ}。飛び去った後空襲警報も遠のいて—

敬太 行ったぞ。もう、大丈夫だ。

コトエ 怖かったー。死ぬかと思った。

良介 グラマン、仙台の方へ飛んでったぞ。

節子 空襲になるの？

敬太 バカっ。仙台には台原に大きな高射砲があるんだ。グラマンやB29が近づいたら、ダダダダダーって撃ち落とすんだぞ。

良介 それ、ほんと？

敬太 本当さ。日本が負けるわけないだろ。神風が吹いて鬼畜米英をやっつけんだ。

良介 すげえなあ。(喜んで)いざこい、ニミツツ、マッカーサー、出てくりや地獄へ逆落とし…。

—敬太も、節子も声を合わせて歌う。蝉の声、再び。—

N しかし、神風は吹かなかった。わたしたちが、グラマン幾の気まぐれな機銃操射に襲われたその夜、忘れもしない昭和20年7月10日、仙台が空襲に見舞われたのだ。

—障子を勢いよく開ける—

昭子 敬太、大変。仙台が、仙台が燃えてる。

敬太 えっ、兄ちゃんは？ 孝男兄ちゃんは？

N 姉の昭子と庭に走り出て驚いた。夜だというのに仙台の方角は夕焼けのように赤々と燃えていた。B29から大量に落とされる焼夷弾^{しょうい}が、きらきらと花火のようにきらめくのが遠目にも分かった。それは不思議に悲しく、美しい光景だった…。

昭子 父ちゃん、今仙台に行ったら危ない。

父 行かねばなんね。孝男が無事か確かめないと。

敬太 孝男兄ちゃん、大丈夫だよ。高射砲があるから…。

父 高射砲のある台原辺りは一番にねらわれっぺ。孝男のいる上杉町はすぐ先だか

ら…。とにかく、行ってくつから。

N 父は50キロも先の仙台に、背囊^{はいのう}を背負い古ぼけた自転車に乗って、兄を捜しに行った。3日後、疲れ果てた父が帰ってきたが、兄の孝男の姿はなかった。

父 どこもかしこも焼け野原で…孝男の下宿は、形もなくて…。

母 もう駄目だ。孝男はもう…死んでるっちゃ。わー。(泣く)

昭子、敬太 兄ちゃん、兄ちゃん。兄ちゃあーん。(泣きながら。)

N 長男の孝男は仙台の大学で学んでいた。極度の近視のため、徴兵を免れたので、母は喜んでいて。秀才で、優しい兄は田口家の期待の星だったのだ。しかし、仙台空襲の夜からわたしたちは二度と兄に会うことはなかった。

モノ くそ…。アメリカめ。兄ちゃんをよくも、よくも。絶対復讐^{ふくしゅう}してやるからな。おれが大きくなったら、軍人になって、兄ちゃんの敵^{かたき}をとってやる。見てろ…見てろよ！

玉音放送 忍びがたきを忍び、耐えがたきを耐え…(以下、バックに)

N わたしが大人になるのを待たずに戦争は終わった。仙台空襲からわずか1か月余りのことだった。日本には、進駐軍と呼ばれたアメリカを主力とする連合軍とともに、民主主義が上陸してきた。農地改革が実施されたため、地主だった我が家は多くの田畑を手放さねばならず、戦前より生活は一層苦しくなった。わたしたち子供は勉強どころではなかった。毎日食えること、生きること、精一杯だったのだ。

良介 あーあ、腹減ったなあ。

節子 あっ、外人だ。

N 見ると、役場の高橋さんが背の高い初老の男と歩いていた。男の白髪混じりの赤い髪が秋風に吹かれている。それまでろくに外国人を見たことのなかったわたしたちは、こんな田舎に占領軍以外の一般の外国人が来た、それだけで驚いてしまった。

敬太 なんだ、あいつは。

良介 おれたちつかまえて、売り飛ばしたりしねえべな。

節子 でも、なんだか優しくさうだよ、あの人。

高橋 おーい、敬太。悪いが君んちに、案内してくれねか？

敬太 …。

良介 そいつ、スパイか？

高橋 ははは、スパイなことがあるか。もう戦争は終わったんだぞ。この人はな、バート・マクダニエルさんといってアメリカから来た宣教師なんだ。

マクダニエル コンニチワ。

良介 しゃべったあ。

敬太 逃げろっ。(わっと逃げ出す子供たち)

モノ アメリカだ。兄ちゃんを殺したアメリカ人が来た。

N そのアメリカ人は来日のあいさつに来たらしく、近所を回って我が家にもやって来たのだった。男は分厚い本を片手に静かに話していった。父も母も親切にもてなし、姉までその男の話を熱心に聞いていたのだ。男が帰ってから、わたしはやっと家に入った。

敬太 何の用だよ。あいつ。

母 駅前に教会開くんだってさ。(茶わんを洗う音)

敬太 教会？ 何それ。

父 キリストさんの教えを広めるとこだ。

敬太 キリスト？ だれそれ。

母 よく分かんないけど、アメリカの宗教の神様だと。

父 ああ、ヤソ教の御本尊だろう。

節子 キリスト教だね。神は愛なりってあの外人さん言ってた。教会かあ。

敬太 なんだよ、姉ちゃん。

節子 なんだか、行ってみたいなあ。

敬太 何言ってんだよ。アメリカじゃないか。

節子 バカね、戦争は終わってんのよ。アメリカのいいとこ、日本だって見習わなきゃ。

敬太 姉ちゃんのバカ！

節子 敬太、待ちな。

モノ バカ、バカ、あんな敵かたきに親切にして。父ちゃんも母ちゃんも、姉ちゃんも、みんなバカだ。おれはみんなとは違う、孝男兄ちゃんの恨みは忘れないからな。

N 兄の孝男を殺したと同じアメリカ人、ほんの数年前まで鬼畜米英とののしっていた大人たちの変わりようにわたしは納得がいかなかった。戦争に負けるというのは、

心まで負け犬になってしまうことなのか。そう思った。勉強を教えてくれた兄、大事にしていた小刀をくれた兄、眼鏡をかけた兄の優しい顔がしきりと思い出された。

モノ 畜生、兄ちゃんの敵、絶対打ってやっから。絶対。

N もちろん、あの男が兄を直接殺したのではないことは分かっている。しかし、幼いわたしの心の中は、憎しみで熱く燃え盛っていた。わたしの中では、戦争は少しも終わっていなかったのだ。わたしはそのアメリカ人の後を追って、無我夢中で裏山に上っていった。

モノ いた。見てろ。

N ガキ大将のわたしには石投げはお手の物だった。先のとがった石を選び、ねらいを定めた。だが、いざ投げようとすると、手が震えた。

モノ あいつは敵だ。兄ちゃんを殺したとおんなじアメリカ人だ。あいつが憎くないんか。…投げるんだ。投げろ。

マクダニエル ワオウ。

N やった。男が額を押さえてうづくまるのを見て、わたしは夢中で駆け出していた。

<後編>

N 1945年、昭和20年の仙台空襲で兄の孝男を亡くしたわたしは、戦後村にやって来たアメリカ人の宣教師に、憎しみを込めて石を投げつけたのだった。石はまっすぐ額に命中した。

敬太 やったあ、ついにやったぞ。

N 男はうづくまったまま動かない。一度は逃げ出したものの、気になったわたしは恐る恐る近寄ってみた。その瞬間、男が額を押さえながら立ち上がった。指の間から血が流れている。

敬太 うわあっ。

マクダニエル マッテ。

モノ おれが石を投げたこと、あいつがだれかに言い触らしたら…。父ちゃんに知れたら、どうしよう…。

N その夜の夕食の時だった。

母 なんても、マクダニエルさん、トメ婆さんの畑手伝ってるんだってさ。

父 ほお、アメリカさんも親切だな。

昭子 今朝会ったけど、ケガしたみたい。額のどこ傷になってた。

母 あらあ、気の毒に。

父 山でも行って転んだんだろ。

昭子 でも額だよ。ほかはなんともなかったし、ほんとに転んだのかな。だれかに襲われたとか。

父 めったなこと言うもんでね。村にはそんなバカはいね。

敬太 ごちそうさま。

母 あれ、もう終わり?

敬太 うん。

母 腹でも痛いんか。

敬太 なんでもない。(障子の閉まる音)

昭子 変なの。おかしな敬太。

モノ …あいつ、おれが石を投げたこと、だれにも言わなかったんだ。なんでだ?

N 敗戦で心まで荒廃した人々に、キリスト教は好意を持って迎えられた。やがて、穏和なマクダニエルさんが村外れの民家を借りて開いた日曜学校や礼拝に、次第に人々が集まってくるようになった。そしてあろうことか、姉の昭子までその教会に通いだしたのだ。

敬太 見えるか?

良介 うん。敬ちゃんちの姉ちゃん、いる。役場の高橋さんもだ。

敬太 くそう、アメリカめ。姉ちゃんばかりか高橋さんまでだましやがって。

コトエ ね、もう帰ろ、ねったら。

節子 のぞき見、悪いよ。帰ろうよ。

敬太 弱虫。お前だけ帰れ。だから女はやなんだ。

高橋 (ガラッと窓が開いて)お前たち、そこで何してる?

子供たち わあっ。(てんでに走る。)

高橋 あ、おい、そっちは危ないぞ。
敬太 わあっ。(ボチャン)
良介 くせえっ

N その瞬間わたしが落ちた場所は、情けないことに、肥えだめだった。当時は田んぼのあちこちに肥えだめがあった。そこに落ちることは、子供にとって大変に不名誉なことなのだ。

敬太 わああああん。
マクダニエル どうシマシタカ?

N わたしの泣き声を聞きつけて、中からマクダニエルさんが出てきた。

マクダニエル オウ、これは大変。泣かないで。洗いましょ、ネ。

N そう言うと、マクダニエルさんは汚物まみれのわたしの手をとって井戸まで連れていき、嫌な顔一つせずにきれいに洗ってくれた。彼は不名誉なわたしの姿を笑わなかったし、集会を台なしにしてしまったのに、少しもしかったりしなかった。それから、わたしたちにクッキーとジュースを振る舞ってくれた。敵に情けを受けたくはなかったのだが、見たこともないごちそうの前で、わたしはすっかりおとなしくなってしまった。

良介 うめえなあ。
マクダニエル おいしいですか? おかわり、ドゾ。

N そっとマクダニエルさんの方を見ると、額の傷がはれ上がっているのが見えた。わたしは慌てて目を伏せた。

節子 この人、だれですか?

N 粗末なタンスの上に写真立てがあった。海軍の制服を着た赤毛の青年が、ほほえんでいる。

マクダニエル 息子のダニーです。ミッドウェイの戦い、行きました。
昭子 ダニーさんは、今アメリカにいるんですか?
マクダニエル イイエ、天国、います。ミッドウエイで、戦死しました。

昭子 えっ…。

コトエ かわいそう…

モノ この人の子供は、日本軍に殺されたんだ。…でも、でも、どうして憎い日本人に親切にするんだ？

N マクダニエルさんは遠くを見るような目をしていたが、やがて静かに語り始めた。

マクダニエル ダニーが天国行って、ワタシ悲しかった。ニッポン、敵、憎い、思いました。泣いて、神様に祈った。日本負けるように、祈った。

モノ そうだ、日本は負けた。惨めに無条件降伏したんだ。

マクダニエル けれど、日本負けてもシアワセじゃなかった。ワタシの心、憎しみでいっぱい。悲しかった。…そんなとき、神様は聖書をとおして、教えてくれました。『あなたの敵を愛せよ。』ワタシの敵はニッポン、そう、ニッポンを愛しなさい、神様そうおっしゃった。そうです。まことの神様知っているワタシのすることは、日本に復讐することじゃない、神様の愛を、伝えること。それが、分かりました。

昭子 神様の愛…？

マクダニエル ソウです。ワタシたちを愛して、ワタシたち人間の罪のために、神の子キリスト様が十字架にかかって死にました、そのことを受け入れる人たち、みんな天の国に入ることが、できんです。

良介 みんなってアメリカ人だけだべ？

マクダニエル イイエ、日本人もです。アメリカ人もドイツ人も、みんなです。

節子 何人でも？ みーんな？

マクダニエル ソウ、みんな。憎み合うのでなく、愛し合うんです。…ニッポンに来て、皆さんに神様のこと、お話しできて、やっとワタシ、シアワセになりました。ニッポン、大好きになりました。ほんとに、感謝です。心から、感謝です。アリガトゴザイマス。

敬太 (叫ぶように)おれ、おれ…。

良介 敬ちゃん、どした？

敬太 おれ…兄ちゃんかたきの敵、打とうと思って…、おれ、おれが…、マクダニエルさんに石を投げたのは、おれです。おれなんです。わああっ(泣)

昭子 敬太…。

—虫の音、遠のいて—

—日曜の朝、田んぼの一本道—

女 いいお日よりだねっす。日曜の朝から、どこさ行くんだね？
節子 教会です。
男 ああ、マクダニエルさんとこだな。
敬太 今日、新しい教会ができるんだ。
男 へーえ、驚いた。よく頑張ったねえ、アメリカさんも。

N マクダニエル宣教師が来日した次の年の秋、村に教会が建てられた。と言っても掘っ立て小屋に毛の生えた程度のもものではあったが、正真正銘の教会である。わたしと姉は、お祝いに庭で咲いた菊の花を持っていった。黄金色に波打つ田んぼの中に立つ、小さな教会。そのてっぺんには、白い十字架が、朝日に照り輝いていた。

マクダニエル おお、敬太くん、節子さん、よく来てくれました。

N そう言うと、マクダニエルさんは、大きな手でしっかりとわたしの手を握りしめた。

マクダニエル 敬太くん、ありがとう。礼拝に来てくれて、本当にありがと。神様、心より感謝します。

N そう言った彼の目に涙がにじんでいた。なぜかわたしはその時、兄の孝雄とダニーさんがそこにいるような気がした。二人とも優しくそうな目をして、そっと手を差し出していた。

N あれから半世紀以上たった今も、わたしはその時の光景を思い浮かべることができる。憎しみではなく、神の愛を教えてくれた一人のアメリカ人を、わたしは死ぬまで忘れることはないだろう。いや、この地上の命を終えたら、わたしは天国である人にお会いできる。あの燃えたぎる憎しみを“赦す心”^{ゆる}に変えてくれたイエス様の十字架の愛に、わたしも今生かされているのだから。

<完>
